

M32a

## 太陽活動極大期の太陽風構造 - Ulysses との比較

藤木謙一 (名大 STE 研)、大見智亮 (名大 STE 研)、横辺篤史 (名大 STE 研)、小島正宜 (名大 STE 研)

太陽風の速度構造は太陽活動の変化に応じて大きく変動する事が知られている。太陽活動極小期にみられる太陽風速度の二重構造 (高緯度の高速風 ( $> 700\text{km/s}$ ) と低緯度の低速風 ( $\sim 400\text{km/s}$ )) は太陽活動の上昇とともに低速風が高緯度側へと広がり、太陽活動極大期には高速風はほぼ消失する。そして現在、Ulysses の観測から、高緯度帯の高速風が再出現した事が報告されている。

我々は惑星間空間シンチレーション (IPS) を利用した太陽風の速度構造を日々観測しており、Ulysses によって観測された極域高速風の再出現も IPS 観測により捉えられている (横辺ほか、SGEPSS 2001 年秋学会にて報告)。

今回、我々は極大期前後の IPS 観測データに、改良を加えたトモグラフィ法 (ここではダイナミックトモグラフィ法と称する) を適用した。このダイナミックトモグラフィ法を用いることで、比較的時局的変動の大きい極大期付近の速度構造について、より連続的な変化を捉えることが可能である。

こうして得られた極大期付近の太陽風速度構造の連続的な変化の解析、および Ulysses の近日点通過時の太陽風速度データとの比較を行なったので本学会にて報告する。